

《日本研究所 活動報告》

Asian Philosophical Texts 開催報告

上野 太祐

神田外語大学日本研究所・ブリュッセル自由大学東アジア研究センターの共催会議、第二回 Asian Philosophical Texts を九月一〇日に開催した。本会議は、欧米中心主義に基づく従来の哲学〔philosophy〕の在り方を批判し、アジア地域に生まれた思想をも哲学と捉え直すことで、これまで欧米地域にさほど知られてこなかったアジアの哲学を、ヨーロッパ諸語への翻訳や研究論文によって紹介・普及することを目指している。その成果は、*Asian Philosophical Texts: Exploring Hidden Sources* (副題の“Hidden”の含意に注意!)へと順次編纂されていく見通しである。

昨年度、本学日本研究所はブリュッ

セル自由大学東アジア研究センターと学術協定を締結した。これに基づき第一回の会議が、昨年の十月二十五日から二七日の三日間にわたりベルギーで開催された。協定締結二年目の今年度は、本学での開催となった。千葉県に甚大な被害をもたらした台風十五号の襲来により、二日間の開催日程が一日に圧縮されたものの、日本をはじめベルギー、インド、ルーマニアからの発表者六名に加え、その他四名が参加した。小規模開催ではあったが、その分極めて密度の濃い議論が交わされた。

以下、参加記も兼ねてごく手短かにその議論の一部を発表順に紹介しよう。Nilsruti Das 氏は、伝統的なウパニシャッド哲学の思想体系を踏まえ

“Tranquility”の観念の発生について取り上げ、実体と虚妄とをめぐるインドの思考について報告した。Alexandra Mustătea 氏は、山鹿素行(一六二二—一六八五)の「士」概念の重層性や文化的背景を翻訳する際にぶつかった課題から、西洋の knight と日本の武士との不等価な関係に加え、儒教的価値を含む素行の「士」概念の翻訳困難性を明るみにした。筆者は、世阿弥(一二三三—一四四三)が能楽論に説くところの「稽古」を、〈をする〉を積み重ねるなかで自ずとそれへなる自己意識の変容過程と規定し、ここに潜む自己の振幅を問題とした。Roman Pasca 氏は、安藤昌益(一七〇三—一七六二)のテキストにみえる術語の説明(例、聖は「非知り」といった掛詞の音と意味との複層性など)をいかに翻訳しうるかというダイレンマから、日本思想の翻訳に伴う障壁を具体的に示した。Jordanco

Sekulovski 氏は、日本の人々の何気ないふるまい（＝しかた）や発想（＝考えかた）を基礎づけている「型（かた）」を掘り起こし、これが和辻哲郎（二八八九—一九六〇）の説いた「間柄」に結び付いているという視角を提示した。Douglas Atkinson 氏は、私小説をめぐる柄谷行人（一九四一—）とその周辺の豊かな議論を紹介し、哲学研究と文学研究とを越境しつつ近代小説の問題を深く掘り下げた。

本年度は日本開催ということもあり、多くは日本を素材とした研究であった。「日本の思想は古くから翻訳

に支えられてきた」としばしば人は言う。だが、われわれの翻訳は果たして十全であったのだろうか。否、そもそも十全な翻訳とは何であるのか——こうした問いに（哲学的に）納得のゆく答えを未だ持ち合わせていないわれわれは、先の如き言明を厳に慎まねばなるまい。われわれは、やがて、翻訳そのものを問える地平にいたばかりなのだから。

#### 【共催会議プログラム】

Niladri Das, "Can the Notion of Tranquility Occur in Dreaming State."

According to Mandukya"

Alexandra Mustăţea, "Towards a philosophical translation of Yamaga Sokô's 士道"

Taisuke Ueno, "Actor's Practice and Self-Consciousness in Zeami's Performance Theory"

Roman Pasca, "When one thing is many things - Translation as philosophical inquiry"

Jordanco Sekulovski, "Understanding Kata as a meta-axiom of knowledge in Japan"

Douglas Atkinson, "Karatani Kojin and the Origin of Modern Japanese Literature"